

中部地方域方言の推量表現の 分布について

江 端 義 夫

は じ め に

東海東山方言における特色の著しい文法事象について、東条操氏は、『日本方言学』（吉川弘文館 1954）で、つぎのように述べていられる。

この地方には推量助動詞ズ、ズラ、ラ、ツラが広く行われている（新潟には稀である）。ズは行かズ、行かズとして話者の意志を表わす。一見、打消の形に似ているが、これは「行かんず」から出たものである。ズラは雨ズラ、行くズラ、高いズラとして推量を、ラは行くラ、高いラのようにやはり推量を表わすがこれは名詞につかない。行くズラと行くラの相違はズラの方が推量が強いといわれる。

実証的研究としては、1950年ごろ、牛山初男氏が、通信調査によって、中部日本における推量の助動詞の分布（“推量の助動詞「ずら」「ら」の分布」「信濃」六ノ六 1954『東西方言の境界』〈信教印刷 1969〉所収）を発表された。

その後、四半世紀を経た1976年、私は、北陸4県をも含めた中部地方9県域（愛知県・岐阜県・福井県・石川県・富山県・新潟県・長野県・山梨県・静岡県）について、方言の臨地調査に従い、推量表現についても調査することができた。

本稿には、およそ、二つの目的がある。一つは、中部地方域での推量表現諸事象について、その実態を明らかにすることである。他の一つは、私が、1966年から1968年にかけて、愛知県地方域に臨地調査して作製した、老少二年層の方言分布図をも利用することによって、推量表現の諸事象の動向を明らかにすることである。

調査期間は、1976年3月から10月までの8ヶ月間である。調査日数は77日である。

調査地点は、老年層については、167地点である。その各地点で、60才台の土地生えぬきの女性一名について、調査を行なった。少年層については、36地点にとどまる。その各地点で、少なくとも片親が純粋土地っ子で、土地生れ土地育ちの中学2年女子一名について、調査を行なった。以下の考察では、当該域の少年層図の分布への言及は、最小限にとどめたい。

当該項目の質問文は、「あしたは晴れるだろう。」というのを、土地ことばでどう言いますか？」であった。

I 推量表現（「～だろう」）の用態

推量表現の諸相のうち、翌日の天候を推量して、「あしたは晴れるだろう。」と言う時の「だろう」に相当する諸事象は、中部地方域で、おおよそ、次の2群とその他の事象とに

(2) 中部地方域方言の推量表現の分布について

分類される。

- 「ダラーズ」「ダラー」「ジャラー」「ヤラー」「ズラ」「ラ」
- 「ダロー」「ジャロー」「ヤロー」「ロー」

その他……「ペー」「デンヨー」

まず、これらのうち、当該域で特視すべき事象について、その実生活上での使われざまを、自然傍受調査資料にもとづき、以下に考察する。使用する实例は、すべて、私が1963年から1976年までに、当該域で臨地調査を行なって得たものである。諸事象の分布に関しては、Ⅱで述べる。

1. 「ダラー」

長呼形の「ダラー」と短呼形の「ダラ」との2つがある。これは、「～であらう」がつづまって、「ダラー」となったものであろう。

「ダラー」はおもに、体言・用言に承接する。このほか、助動詞・副詞・助詞にも承接して、広義の推量表現をつくる。

「ダラー」の表現機能は、単純な想像・推測・推量よりも、確実な推察・推定・確認・同意要求の方が多い。实例は、以下のとおりである。

まず、人の立場を推察して、「ダラー」と言う。

○ワルキデモ ナイダラーケドモ テー。悪気でもないだろうけどもねえ。(老女→中女) 愛知県渥美郡赤羽根町西瀬古 1965

○ジューダイノ ウチニ デタダラー。十代のうちに、(村を) 出ただろう。(老女) 愛知県南設楽郡鳳来町木郷 1976

他方、推察した内容を相手にもちかけ、確認する表現も多い。

○ノーキョー ホニダラー テー。農協木位だろうねえ。(老男→筆者) 愛知県渥美郡赤羽根町 1965

○カニチュー モンダロ。ソーダラ。蟹と言うものだろう。そうでしょ？(中男→中男) 愛知県知多市南粕谷 1965

○ホーダラー。そうでしょう？(老女) 愛知県東加茂郡足助町 1976

「ダラー」には、比較的自由な承接法が認められる。表現機能に関しては、推察や確認を中心にしたものが認められる。

2. 「ダラーズ」

「ダラーズ」と同類の事象には、長音が脱落した「ダラズ」、さらに短縮した「ダズ」、古形を保つ「ダラス」などがある。「ダラーズ」の出自は、「～であらうず」とされよう。^{注1}承接のしかたは、「ダラー」のと同じである。しかし、形容詞に関しては、

○マー ナカラーズ。もう無いであらう。(中男→筆者) 愛知県知多市南粕谷 1965

○イマワ ワテツデー モノワ ナイダラーズ。今は、「わてつ」というものは無いだろうよ。(老男→筆者) 愛知県知多市南粕谷 1965

のように、二種の承接法がある。

自分の推量に、確信を持った表現に、「ダラーズ」がよく使われる。

○ザソ オモワセルダラーズ。コソナ 下コエ コニャ ヨカッターニ。さぞかしお思

いになるだろうよ。こんな所へ来なければよかったにと。(老男→筆者) 愛知県知多市南粕谷 1964

○マー ハラガ ヘッダラーズ。(赤ん坊)は、もう腹がすいただろうよ。(初老女→中女) 愛知県知多市南粕谷 1966

それゆえ、「ダラー」の文アクセントは、上昇調が多かったけれども、「ダラーズ」のは、下降調が多い。

また、「ダラーズ」には、上例以外に、相手に反撥したり、念を押ししたりする機能がある。

○ナーニガ ヤワコカラズ。何が(ごはんが)柔かいことがありますでしょうか。(初老女→初老女) 愛知県知多市南粕谷 1966

つぎに、「ダラス」は、逆接の接続助詞「ケド」が承接して、「～ダラスケド……」となり、推量を婉曲的に表現することがある。

○マイリニ キテ クレルダラスケド ナン。参拜に来てくれるだろうけどね。(老女→筆者) 愛知県知多市南粕谷 1963

○モッコ、オマエニヤ ワカルダラスケドモ……。 “もっこ(畚)”，お前にはわかるだろうが……。 (老男→筆者) 愛知県知多市南粕谷 1965

「ダズ」は、つぎのようにおこなわれている。

○ソレワ ドーデモ イー ヨーナ モアダズ。それは、どうでもいいようなものだろう。(老男→筆者) 長野県小県郡和田村字上和田 1974

3. 「ジャラー」「ヤラー」

岐阜県域を中心にし、愛知県にも存する「ジャラー(ズ)」の実例は、今日、稀にしか聞かれない。「ジャラーズ」は、「ダラーズ」から変化したものであろう。

○シネルジャラーズガ。死ぬるだろうけど。(老女) 岐阜県山県郡美山町岩佐 1976
これにひきかえ、「ヤラー」は、岐阜県下の日常会話で、かなりよく使われている。「ヤラー」は、「ジャラー」の変化したものである。

○アシタ テソキヤラ カー。明日は天気だろうか。(老女) 岐阜県恵那郡付知町 1976

○オケターコノ トキワ ソコドコ ネーヤラ。お蚕を育てる時は、いる場所が無いほど忙しいでしょ。(老女→筆者) 岐阜県美濃加茂市太田町下町 1976

○オミヤサンガ アルヤラ。お宮さん(神社)があるでしょ。(老男→老女) 岐阜県恵那郡明智町常盤町 1976

「ジャラー(ジャラ)」「ヤラー(ヤラ)」は、「ダラー(ダラ)」よりも、表現にいくぶんやさしみがある。

4. 「ズラ」

「ズラ」と「ズラー」のうち、短呼形「ズラ」のほうが、よく使われる。「ズラ」は、おもに、体言、用言に承接する。そのほか、副詞や助動詞や助詞などにも承接する。

「ズラ」の表現機能は、多様である。一つに、現前の空模様を把握して、自信ありげに表現するばあいがある。

(4) 中部地方域方言の推量表現の分布について

○アシタワ アメズラ イ。 あしたは、おそらく雨だろうね。(老女) 長野県上伊那郡箕輪町 1976

○アシター アメズラ チーシ。 あしたは雨でしょうねえ。(老女) 長野県木曾郡山口村馬籠 1974

二つに、ことの断定をさしひかえ、婉曲げに表現するばあいがある。

○モーチャー ブラ ニー。 盲腸炎だろうよ。(中男→老女) 長野県木曾郡檜川村字賛川 1974

○ソリヤー アル。アルズラー。 それは(きっと)ある。あるだろう。(老男) 長野県木曾郡山口村馬籠 1974

三つに、「ズラ」には、相手に問いかけ、念を押し、肯定の返事を期待するばあいがある。

○オジサンモズラ。 おじさんも(バスで来るん)でしょ？(老女→中男) 山梨県南都留郡河口湖町大石 1976

○イゲニ オル ヤツズラ。(ザリガニの絵を見て)池に居るやつでしょ？(老男→筆者) 愛知県豊田市植田町 1965

四つに、相手(聞き手)が返答してくれるのを期待しつつ、話者が自問するばあいがある。

○モーチャーナンテ シラナンズラニ。 盲腸炎なんて、今まで知らなかったろうにね。(老男) 長野県木曾郡檜川村字賛川 1974

○ケサオカヨリ シタズラ カー。 けさおか(人名)よりも年下だろうか？(老女→老女) 山梨県中巨摩郡芦安村小曾利 1976

5. 「ラ」

「ラ(ラー)」は、ふつう、動詞に承接する。このほか、形容詞、助動詞にも承接する。「ラ」の承接法の幅は、「ズラ」のよりも狭い。

「ラ」は古語の助動詞「らむ」が、「らむ」>「らん」>「らう」>「らー」の変化を経て、生じたものであろう。

「ラ」には、おおよそ四つの表現機能がある。その一つは、つつましい婉曲の推量表現を形成するばあいである。これは、以下のように「ズラ」のと比較すると、用法の差が明瞭である。

○マタ ラルジャ ネーラ カネー。 また、雨が降るのではないだろうかねえ。(老女) 山梨県西八代郡市川大門町 1976 《婉曲的》

○アメガ フリフーズラ。 雨が降りそうだろう。(中女→老女) 静岡県田方郡修善寺町紙谷 1976 《直截的》

二つめに、「ラ」は、眼前の事物、人間、動物の存否(在る・無い・居る・居ない)を確かめるばあいがある。

○クスリガ ソコニ アルラ。 アメ シー。 薬がそこにあるでしょ。飲めよ。(老女) 山梨県東山梨郡牧丘町窪平 1976

○トマトー チイラ。 トマトはないだろう？(中男→老男) 愛知県渥美郡赤羽根町 1965

○ウン。ウチー クル ツモリデ オルラー。 うん。家へ帰ってくるつもりでいるんだらう。(老女→息子) 長野県木曾郡山口村馬籠 1974

○ムヲシノ トモダチガ イブラー。 昔からの友達が居るのでしょうか。(老女→中女) 静岡県賀茂郡南伊豆町大瀬 1976

三つめに、「ラ」には、聞き手に対して、肯定のあいづちを期待するばあいがある。

○シッテルラ。ヨロズヤノ フミチャ。 知っているでしょ？ 雑貨屋のフミちゃん。(老男→中男) 長野県木曾郡榑川村賛川 1974

○シットラ センラー。 知ってはいないでしょう。(中男→筆者) 静岡県湖西市湖西町白須賀 1965

○ワッヤヒンラ。 ことばがわからないでしょ？ (老女→筆者) 愛知県渥美郡渥美町中山字北郷 1965

四つめに、「ラ」には、独白的な自問の推量表現をするばあいがある。これには、概して形容詞が関与している。

○アイシラ ハヤイラー。 ああいう衆は、(免許を取るのが) 早いにちがいない。(老男→老男) 山梨県北巨摩郡高根町 1973

○イッケンダカラ イーラ。 (古い家は) 一軒だからいいだらう。(老女) 山梨県東山梨郡勝沼町 1976

「ズラ」と「ラ」との表現機能を比較すると、ひとまず、よく似ていることが言える。両者の相違点は、「ズラ」が、未来的、抽象的ことがらについての推量が特色であるのに対し、「ラ」は、概して現実的、具象的存在についての確認推量が特色である、と言うことができようか。

さて、以上とは分類を異にする「ダロー・ジャロー・ヤロー・ロー」のうち、「ロー」について、その表現機能を考察する。

6. 「ロー」

「ロー」は、岐阜県下と新潟県下とで、よく聞かれる。「ロー」の出自は、「らむ」>「らん」>「らう」>「ろー」とたどられる。現在のことがらについての推量を表現することが多い。

○カゼガ フクデー ツレニクイロー。 風が吹くから、(魚が) 釣りにくいでしょ？ (中女→初老男) 岐阜県吉城郡宮川村杉原 1976

○ココア スジガ アルロー。スジガ。 ここ(の店)には、寿司が(売って)あるだらう。寿司が。(中男→中男) 岐阜県吉城郡宮川村杉原 1976

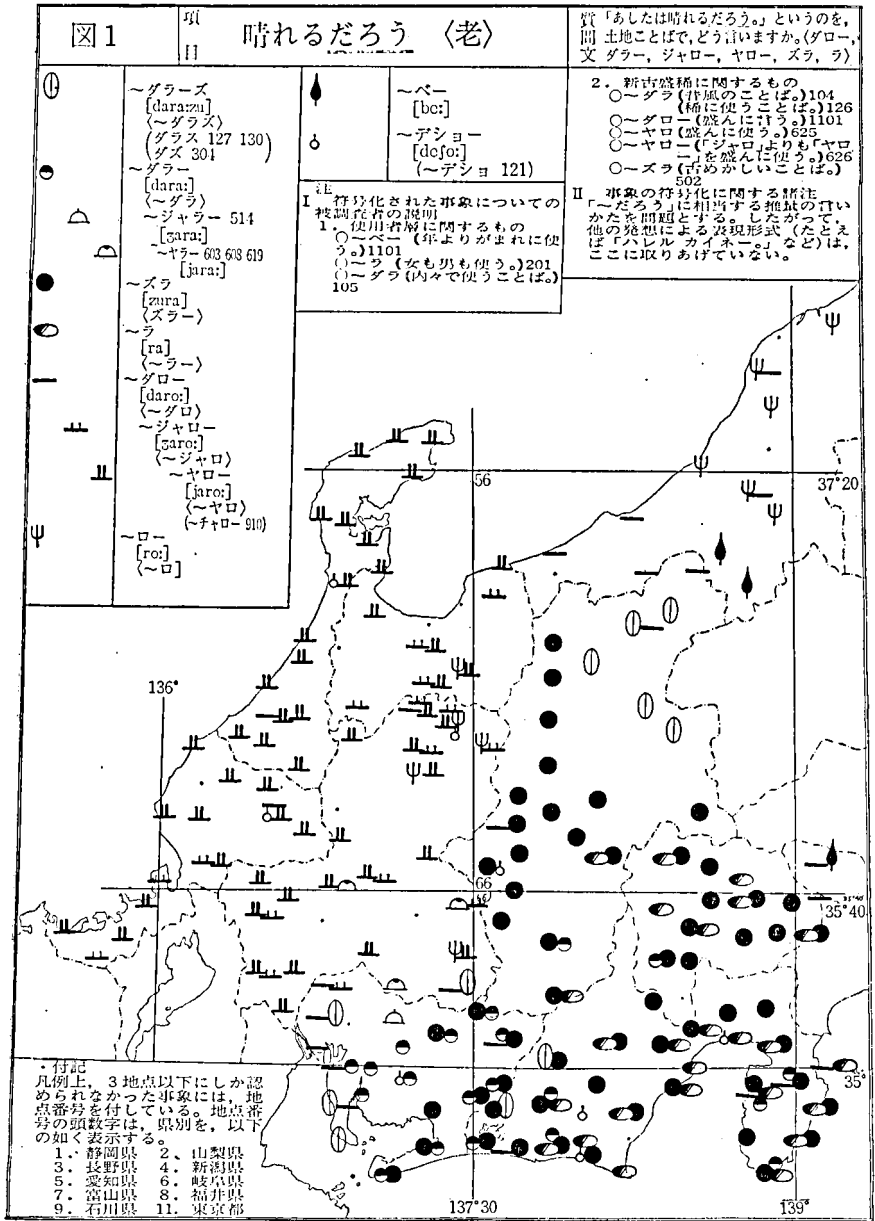
○ノーキバスノ ハシガ アルロー。 濃城バス(車庫)の(傍に) 橋があるだらう？ (中男→筆者) 岐阜県吉城郡神岡町東雲 1976

○アマ アム ネー。アマ タベルロー。 飲物(牛乳)を飲むね。牛乳を飲むでしょ？ (老女→幼女) 新潟県新潟市横尾 1976

○マンマ グーロー。 食物(昼食)を食べるでしょ。(おひるにしましょう。)(老女) 新潟県新潟市横尾 1976

以上、「ロー」は、初対面の人、年上の人、同僚、子どもへのもの言いに認められる。

(6) 中部地方方言の推量表現の分布について



やさしみ、親愛の情が醸成されてもいよう。

「ロー」が、指定の助動詞を介さずに、単独で、用言の言い切りの形に承接して、推量表現を形成するのは、上述の諸事象に比して、特異である。

II 「晴れるだろう」推量表現の分布とその考察

中部地方域に、推量表現を形成する上述の諸事象が、どのように分布し、どのような分布域の盛衰を見せるかについて考察したい。

1. 「ダラー (ダラ)」

図1(中部地方域老年層)について、「ダラー(ダラ)」の分布を見ると、愛知県の三河に、「ダラー(ダラ)」の隆盛な分布がある。遠江にも、これがよく行なわれ、伊豆半島にもこの分布がある。山梨県南部、長野県南部の2地点にも、これがある。総じて、「ダラー」は東海道筋の地域での表現と言えよう。少年層においても、「ダラー」の分布は、東海道筋で衰えていない。「ダラー(ダラ)」は、老年層で、以下の地点で聞かれた。

南設楽郡鳳来町木郷、北設楽郡設楽町大字田口、北設楽郡稲武町武節、新城市上平井、渥美郡田原町大字浦、渥美郡渥美町堀切東、東加茂郡足助町親王町、岡崎市明大寺町、豊田市寺部町4丁目、碧南市音羽町1丁目、刈谷市泉田町高畑一色、東海市養父町城之内(以上、愛知県)磐田市石原町、天竜市二俣町二俣、田方郡土肥町平野、田方郡修善寺町紙谷、湖西市鷺津(以上、静岡県)南巨摩郡早川町葉袋(以上、山梨県)下伊那郡上郷町下黒田(以上、長野県)

四半世紀前の牛山氏の報告によれば、「ダラー(ダラ)」について、——(必ずしも、この比較は有効ではない。二つの研究調査は、調査者、調査方法がまったくちがうので、同等に資料を比較しえないからである。しかし、一つの試行ではある。)——図1でのよりも広域な分布が、以下のように指摘されている。

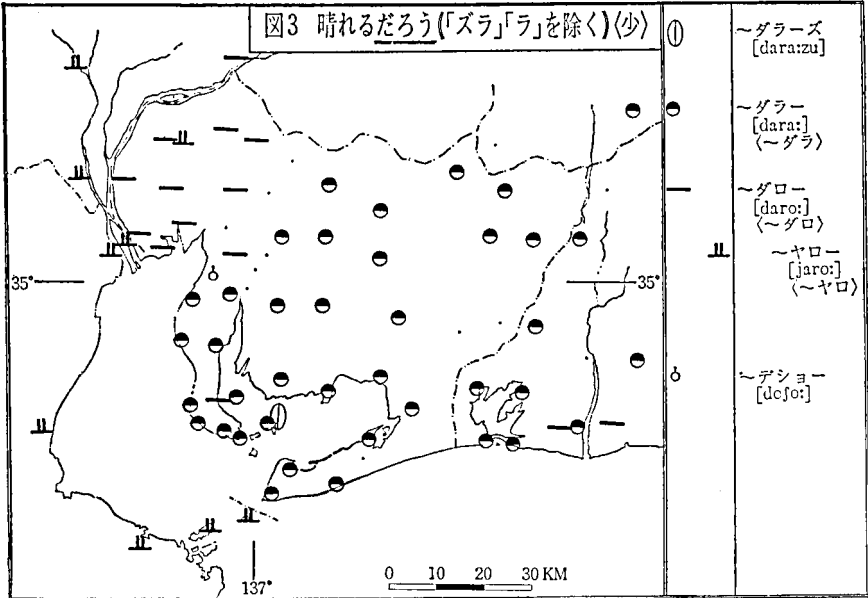
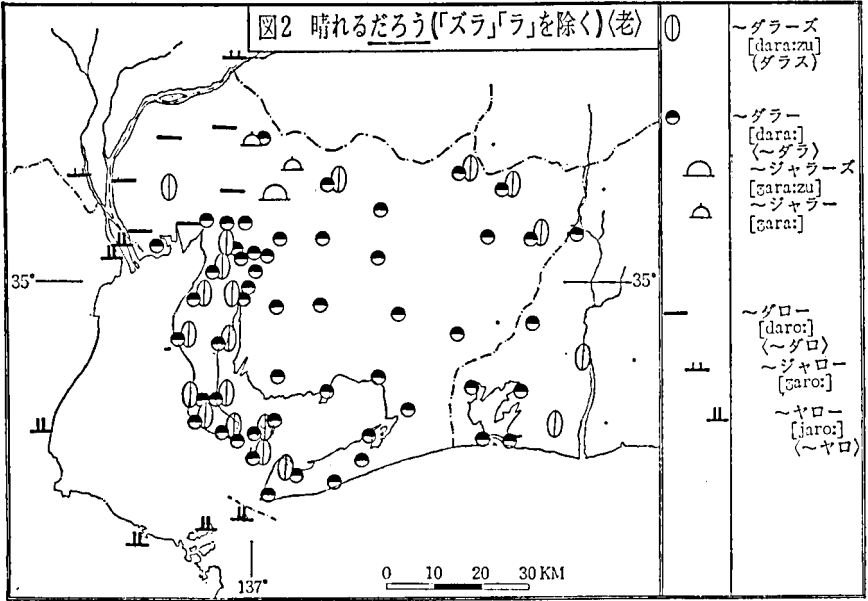
《ダラについて》

50%以上を使用している地域は、静岡県(除静岡市、清水市)と愛知県の全域と長野県の下伊那郡であり、50%以下では、長野県では、上伊那・西筑摩の南半部・北信の下高井・下水内であり、岐阜県では益田の南半部、恵那郡の全域等が全郡的に使用せられている。山梨県には南巨摩郡の大部、石和町を中心とする東・西山梨・東八代の地域に広い分布を見せている。

したがって、「ダラー(ダラ)」は、かつて、50%以下の分布によって、山間部を中心に、広い分布を見せていた山梨県域、岐阜県南部、南信、北信で、著しい分布の衰退をおこしたとすることができよう。

それにひきかえ、愛知県および遠江西部では、「ダラー(ダラ)」が、なお盛んである。これは、図2(愛知県域老年層)で見られるとおりである。尾張北部地帯を除いた愛知県全域で、老年層ばかりでなく、少年層においても、「ダラー(ダラ)」が優勢な分布を示す。図3(愛知県域少年層)での「ダラー(ダラ)」の分布は、まったくと言っていいほどに、図2のと似ている。すなわち、①老少の分布域に、変動が認められない。のみならず、②「ダラー(ダラ)」は、遠江西部の天竜川流域で、分布量が増している。「ダラー(ダラ)」

(8) 中部地方方言の推量表現の分布について



は、東進しつつあるの^(注3)である。

だが、「ダラー(ダラ)」は、尾張北部以西で、分布が稀薄である。知多半島を除いた尾張北部の濃尾平野では、「ダラー(ダラ)」を、もはや捨てているのである。ここには、老・少年層ともに、共通語と同形の「ダロー」が、落ちついた分布を見せている。老年層図で名古屋の南西部や北東部に存した「ダラー(ダラ)」は、少年層図において、「ダロー」に転じている。

しかし、知多半島や三河以東では、「ダラー(ダラ)」が老・少年層ともに隆盛なため、少年層にあっても、「ダロー」が常用されていないのが注目される。

2. 「ダラース」

図1(中部地方域老年層)における「ダラース」は、その分布が二つに見分けられる。一つは、長野県北部に強力に存立する分布である。他の一つは、愛知県の知多半島や愛知・岐阜・静岡の県境近くに散見されるものである。周囲分布の理を適用すれば、これは、かつては、長野県北部の「ダラース」と愛知県及びその周辺のそれとが、連続した分布を形成していたであろうと解される。また、「ダラー(ダラ)」分布に比して、この領域はずいぶん狭い。図2(愛知県域老年層)において、「ダラース」は、愛知県域で、ドーナツ状の分布を持つ。「ダラース」は、知多半島に顕著な分布を示し、東海道筋にはなくて、三河の北部地帯と天竜川西岸とにある。この分布事態は、私どもに、「ダラース」>「ダラー(ダラ)」への変化を示唆するとともに、「ダラース」が、辺地に残存した事実をも示している。これらの事実は、つぎの点でも実証される。図3の少年層図では、「ダラース」が、佐久島の一地に聞かれるばかりとなった。また、「ダラス」は、少年層にはなく、老年層では静岡県浜松市子安町の一地にあるだけである。

3. 「ジャラー」「ヤラー」

「ジャラー」は、図1(中部地方域老年層)において、愛知県瀬戸市に認められるだけである。

「ヤラー」は、岐阜県の美濃の3地点に存在している。

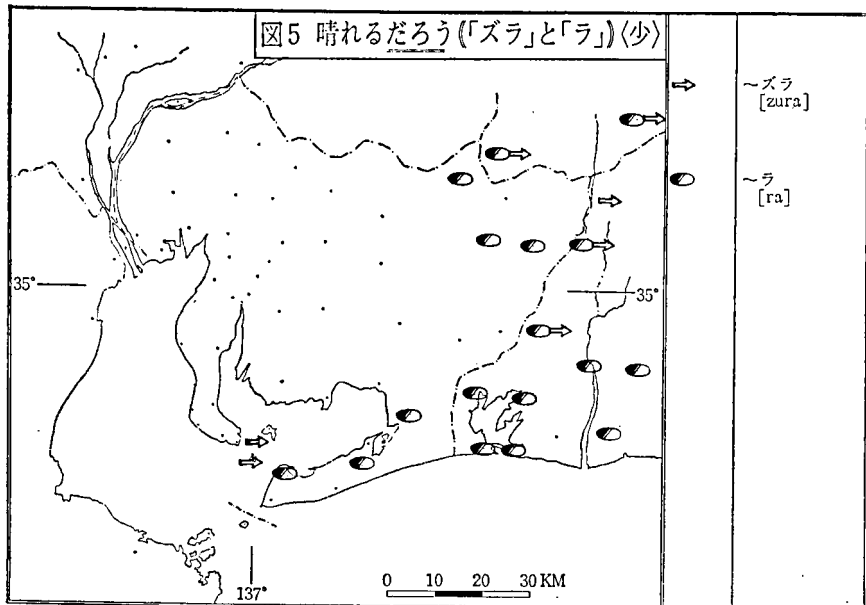
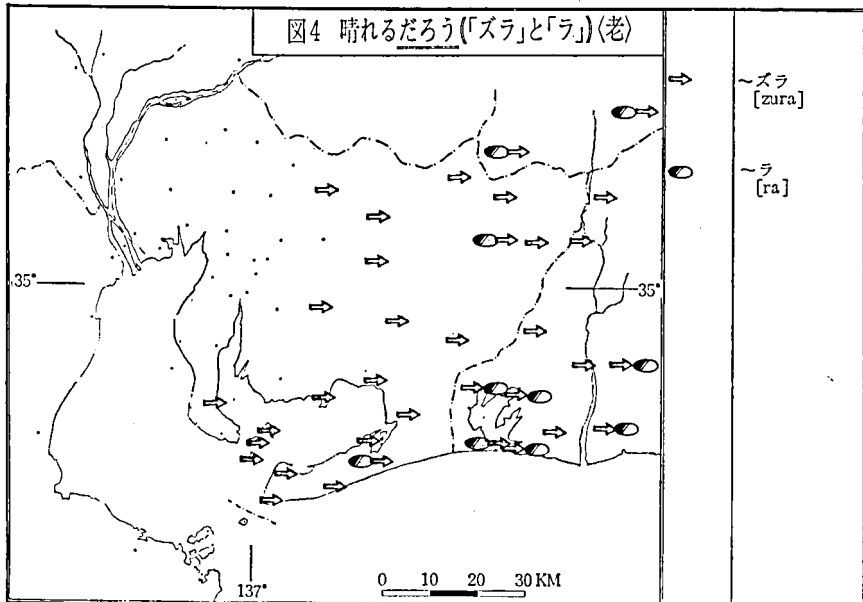
それらは、岐阜県恵那郡付知町秋津、岐阜県多治見市広小路、岐阜県武儀郡板取村上ヶ瀬である。

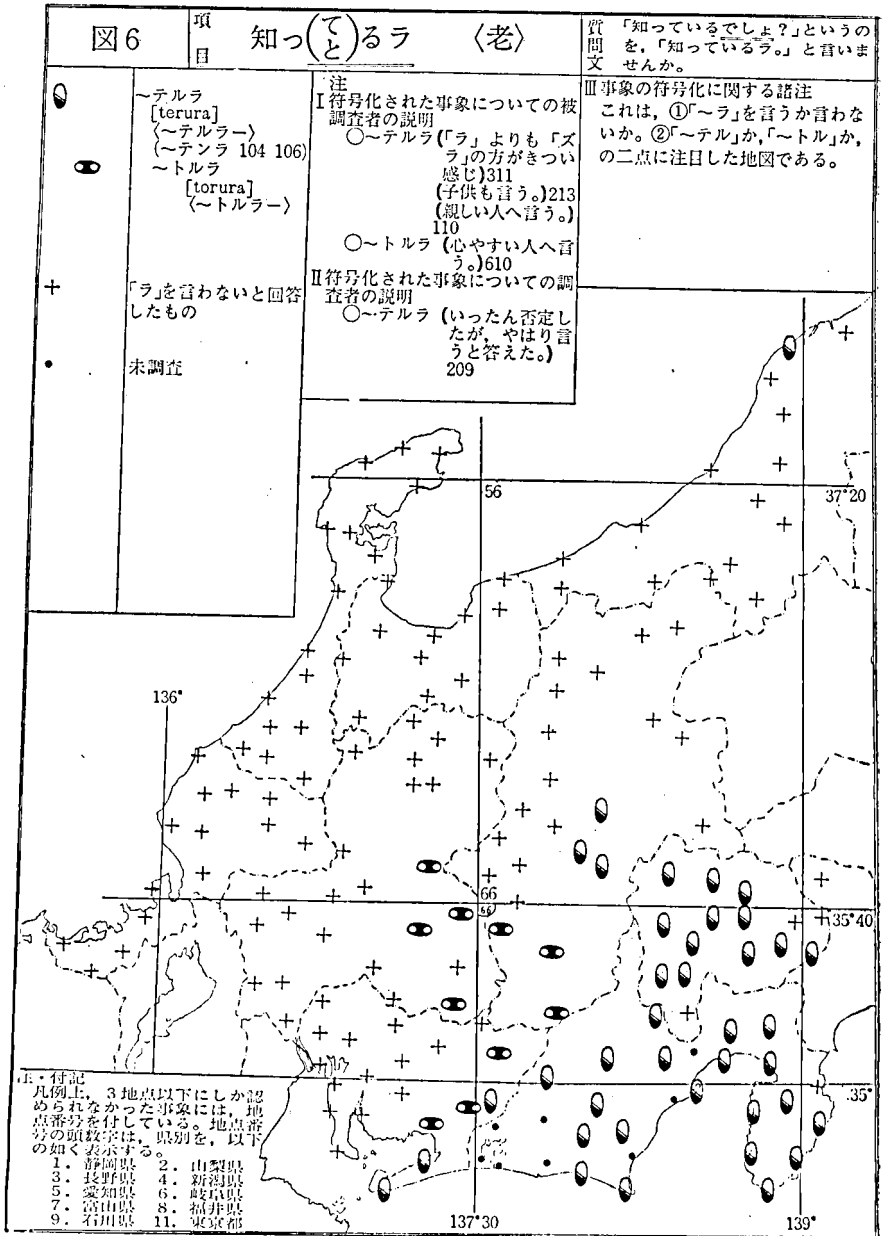
「ジャ・ヤ」の盛んな岐阜県域で、「ジャラー」「ヤラー」の聞かれるのは当然でもある。しかし、それは衰退の一途をたどっている。愛知県域についても、老年層図(図2)において、わずかに存した「ジャラー」「ジャラース」が、少年層図(図3)で消えている。

4. 「ズラ」

図1(中部地方域老年層)によれば、「ズラ」は静岡県・山梨県の全域と、北信を除いた長野県と、三河東半地域とに、一大分布が認められる。少年層では、その分布が狭小になっている。

さて、「ズラ」の動態を考察する。図4の老年層図では、愛知県東部中心に、「ズラ」の広い分布が認められる。「ラ」は遠州を中心に、「ズラ」の分布域の中に包摂されたかたちで、まばらに、併存分布を示す。これに対し、図5の少年層図では、「ズラ」の分布が極





(12) 中部地方域方言の推量表現の分布について

端に衰退した。島嶼や山間地方へ、「ズラ」は迫いやられてしまっている。その代りに、「ラ」が流布し、愛知県域でも積極的に使われて、その分布領域を西の方へと伸展している。

以上、図4(愛知県域老年層)と図5(愛知県域少年層)との比較を通して、「ラ」の分布が西方へ伸展し、「ズラ」の分布が東方へ後退しつつある現状を知ることができた。

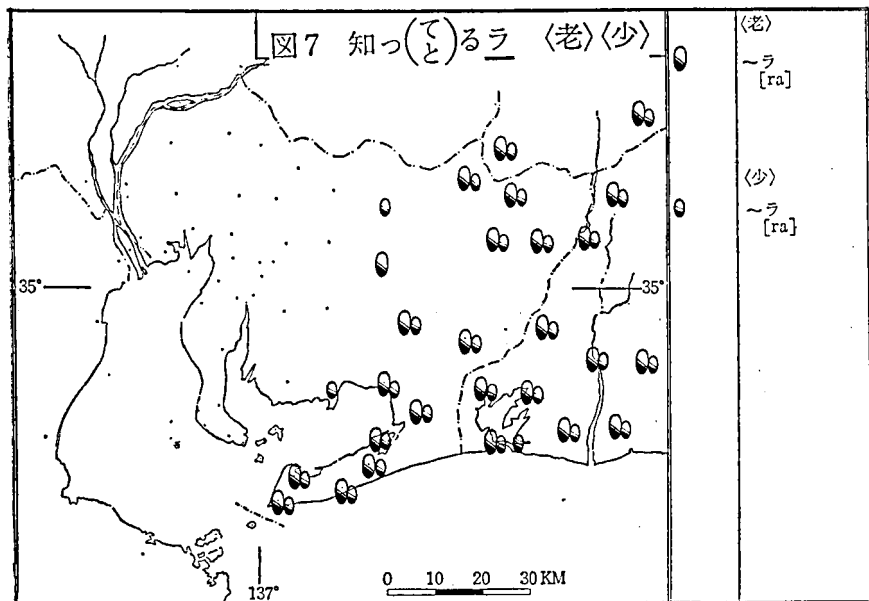
5. 「ラ」

図1(中部地方域老年層)によると、静岡県・山梨県の全域に、「ラ」の隆盛な分布が見える。長野県では、上伊那郡高遠町東高遠花畑の1地にこれが見える。

つぎに、図6(中部地方域老年層)は、聞き手に、「知っているでしょ」と確認要求の質問をする時の、「ラ」の存否を図にしたものである。この図で注目されるのは、愛知・岐阜・長野県の「ラ」の分布である。愛知県では、東三河に「ラ」が分布している。長野県では、伊那谷に「ラ」が分布する。それが甲州の「ラ」の分布へと続く。木曽路の入口に存する「ラ」は、谷の深くへは至っていない。岐阜県下では、木曽川・飛騨川に沿った美濃の東部地域に「ラ」が存する。「ラ」の分布の西限は、愛知県・岐阜県内である。少年層でも、分布域は、上記のと、ほぼ同じである。

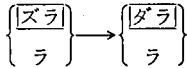
愛知県域での「ラ」の動態に注目したい。図7(愛知県域老・少年層)の「知っているでしょ」において、「ラ」は老・少年層ともに、東三河全域に根強い分布地盤を堅持している。

しかし、「ラ」は、上掲の実例でわかるように、表現機能や承接法が、「ズラ」とは異なる



っている。もしも、「ラ」が「ズラ」の承接法を包摂することがあるならば、「ラ」の分布域は著しく伸びるであろう。その可能性は低い。

現実には、Iで考察したように、「ダラ」は、表現機能や承接法が、「ズラ」とよく似ている。したがって、「ズラ」「ラ」と「ダラ」との接触地域では、



の変化過程に従おうとしているのである。

6. 「ロー」

図1(中部地方域老年層)によると、「ロー」は、長野県と岐阜県との接接地域に、南北の帯状に分布する。またそれは、富山県東南部を経て、新潟県へと伸びている。越後では「ロー」が隆盛である。

図1では、長野県以東の「ズラ」「ダラズ」に、岐阜県・北陸三県での「ヤロー」「ジャロー」が対立している。岐阜県・富山県の東半部における「ロー」の分布は、重要な意味を持っている。ダ>ジャ>ヤと、一般に「ヤ」の新しさが説かれている。西南の京阪方面に強力な分布を示す「ヤロー」が、新しい波として伝播したのであろう。もとから当域にあった「ロー」は、ために、東部の県境へ追いやられたのであろう。

新潟県下においては、中越に「ロー」が隆盛であり、上越など南西部に共通語ふうの「ダロー」がある。いち早く共通語化に踏みきった上越の「ダロー」(上越市中央三丁目、西頸城県妙高村大鹿、糸魚川市上刈)によって、岐阜・富山・新潟に連続分布を成していたと思われる「ロー」の分布が、分断された。かくして、越後に「ダロー」と「ロー」との併存事態が起ってもいる(小千谷市西吉谷字水口、西蒲原郡岩室村字岩室)。新潟県では、北東部ほど「ロー」が優勢である。

III 《「ダラズ」「ダラー」「ジャラー」「ヤラー」「ズラ」「ラ」》対《「ダロー」「ジャロー」「ヤロー」「ロー」》について

図1(中部地方域老年層)では、事象群の明瞭な二つの分布域が認められる。その一つは、「ダラズ」「ダラー」「ジャラー」「ヤラー」「ズラ」「ラ」であり、他の一つは、「ダロー」「ジャロー」「ヤロー」「ロー」である。これら各々を、仮りに、甲類、乙類と名づける。

甲類は、総じて、愛知県東部、岐阜県東部、長野県、静岡県、山梨県、富山県東部など、中部地方東南半に分布し、他方、乙類は、福井県、石川県、岐阜県、富山県、新潟県など、中部地方西北半に分布している。

音形態についてこれら进行分析すると、甲類は /-raa/、乙類は /-roo/ となっている。

日本語方言における推量表現に関して、甲類、乙類のものが、どのように分布しているか。およそ近畿地方、中国地方の山陽側、四国、九州、関東以北に、乙類の分布が見られる。これに対し、甲類は、山陰地方の鳥取県、出雲、^{注5}隠岐、北但馬に分布している。私の臨地調査資料から、次に若干の実例を記す。

(14) 中部地方方言の推量表現の分布について

島根県仁多郡仁多町馬馳で、

○アシタワ テンテキニ ナルダラー ナ。 あしたは天気(晴天)になるだろうね。

(老女→筆者) 1972

島根県飯石郡掛合町で、

○テクセク ヤランナランダラー カ。 あくせく(仕事を)やらねばならないんだらうか。(老男→筆者) 1966

鳥取県日野郡溝口町谷川で、

○ベンキョー シトラニャ イケンダラーズ イ。 勉強していなければ、いけないだらうねえ。(老女→老女) 1972

○ダイハチグルマダラー カ。 大八車だらうか。(老女→中女) 1972

方言的表現と見られがちな甲類は、「ダロー」の共通語用法や、近畿圏を核とした「ジャロー」「ヤロー」を擁する乙類よりも、分布が狭小で、古風とされよう。

大橋勝男氏によって、伊豆諸島に、「ダラー」の存立が確認されている。また、青ヶ島に「ダラーノー」があり、八丈島に「ダラ」と「ダラーノー」「ダラノア」のあることが報告された。^{注6}

辺境に古態事象が残るという一原理がある。近畿、北陸をはさんで、東西に離れて分布する「ダラ」のありようは、これら甲類の諸事象が、日本語方言上、相当の古態性を示すものと、考えられるのである。

ま と め

以上の考察について、主要な点をとりまとめれば、つぎのとおりである。

① 中部地方方言での、注目すべき推量表現は、甲類・乙類・その他に大別される。

- 甲類……「ダラーズ」「ダラー」「ジャラー」「ヤラー」「ズラ」「ラ」
- 乙類……「ダロー」「ジャロー」「ヤロー」「ロー」
- その他……「ペー」「デショー」など

個々の事象の生態は、Iで考察したとおりである。

② 上記の甲類の諸事象は、日本語方言上、周囲的分布を示し、乙類の諸事象よりも、古態性をあらわす。

③ 中部地方域の方言に顕著な「ズラ」の分布は、総じて、退縮する傾向を見せる。「ダラーズ」「ダラズ」「ダズ」「ダラス」も、衰退分布の相を見せる。一口に、「ズ」の忌避と言ってもよからう。

④ 「ダラー(ダラ)」は、中部地方域の東海道筋に根強く認められ、愛知県域では、東方への伸展の相を示し、少しく「ズラ」にとって替ろうともしている。「ラ」は、遠州から愛知県への、伸展の相を示す。

⑤ やさしい表現の「ロー」は、中部地方域で、上越地方を境にして、二つに分断された分布を示す。衰退分布の事象が、明白である。

- 注1 東条操氏は、「未来助辞「ず」の考」(『方言の研究』刀江書院 1949)で、「意志」の「ず」の出自について考証なされている。すなわちそれは、「行かむとす」>「行かむず」>「行かうず」>「行かーず」>「行かず」とされた。
- 注2 平山輝男氏編『伊豆諸島方言の研究』(明治書院 1965)の中で、神津島方言について、「アメガ フルジャー ナイローカ (雨が降るのではないのでしょうか)」の例をあげ、「ローカ」は、いくらかやわらかみのある表現であるとされている。ものは、本稿のと同じであろう。
- 注3 “なお、ズラは近年東海道筋の西部から、ダラに押される動きを見せている。”山口幸洋氏「静岡県方言の過去表現」(国語学)75集 1968)
- 注4 長野県方言の「ラ」の分布については、馬瀬良雄氏が、私の調査結果と同様の指摘をなされている。(『信州の方言』第一法規 1971)
- 注5 神部宏泰氏は、「隠岐方言の存立と特性」(佐賀大学教育学部紀要 22 1974)で、「マ^タゴザ^ツジャラー。(また、いらっしゃるだろう。)」[中村]の例をあげて、隠岐の島後の特殊性を示す事象として、「ラー」を指摘されている。
- 注6 大橋勝男氏著『関東地方域方言事象分布地図』第二巻(桜楓社 1976)の中の Map 93「そうだろう？」(推量表現法)

〈付 記〉 成稿後、藤原与一先生にご高覧たまわり、ご教導を賜りました。記して、心から感謝申し上げます。(1977. 7. 1)

〈追 記〉 小稿Ⅰの5、「ズラ」と「ラ」との用法の比較に関して、柴田武博士は、次のように記していられます。“ラのほうが推量でも、確信を持ってする推量であるのに対して、ズラは確信のない推量と考えられる。……中略……いま、前者を「確実推量」、後者を「不確実推量」と言うことにしよう。”(『現代日本語』朝日新聞社 1976) 脱稿後、この記述を確認することができましたので、記させていただきます。

—広島大学講師—

The Distribution of Suppositional Expressions in the Central Area

EBATA Yoshio

In this paper, the author studies suppositional expressions in the Central area synchronically and diachronically, and gives some consideration to the trend of their change through the distribution of various forms.

The dialect materials used in the research are divided into three groups: (1) the dialect maps based upon the fieldwork in the Central area, March through October, 1976; (2) the dialect maps based upon the fieldwork in Aichi Prefecture, 1966 through 1968; (3) the record of spontaneous conversation collected through fieldwork throughout Japan, 1963 through 1976.

The results: (1) the characteristic suppositional expressions in the Central area are roughly classified into A, B, and others.

A: *darāzu, darā, jarā, yarā, zura, ra.*

B: *darō, jarō, yarō, rō.*

Others: *bē, deshō, etc.*

The description of the usage of those forms is given in the paper.

(2) The forms in Class A are distributed on the fringes of Japan, and are interpreted to be older than those in Class B.

(3) The distribution of *zura* which is one of the characteristic forms in the Central area dialects generally tends to disappear. *darāzu, darazu, dazu,* and *darasu* are also disappearing. It could be said that the use of *zu* is generally avoided.

(4) *darā~dara* persists in the Tōkai area, and is creeping eastward in Aichi Prefecture partly displacing *zura*. *ra* is, on the other hand, creeping westward from the western part of Shizuoka Prefecture into Aichi Prefecture.

(5) The distribution of the simple form *rō* is disrupted at the Jōetsu area. It is a clear indication of the decline of the form.